

## 分野別講座「予習展開による国語科授業づくり」(低学年)

参加者 七十五名

まとめ 福原 廣子

### ○予習で国語科の授業に

劇的な変化を 久保 齋

国語科の授業においてよく見られるのが、教師の突発的な発問に一部の子のみが答えて進んでいくものだ。

しかし、予習で、九月からの国語科授業に劇的な変化を起こすことができる。

### 予習とは

予習とは、授業で子ども達に問う中心課題を、家であらかじめ考え、ノートに書かせることである。予習をさせると、子どもの問いに対する思いが、授業前に分かる。すると、授業展開の見通しが持てる。さらに、家でじっくり考える時間を与えることで、どの子ども答えるを用意することができるのだ。

### お墨つきはしない

授業前にノートを見てよいが、発表してほしい所に花丸などを付けてはならない。花丸をもらえなかった子は、発表する意欲が失せる。あくまで、子どもの思いを知

るだけにとどめておく。

ノート半ページ程度の量を課す半ページ課すことにより、子どもは論理的思考を述べるようになる。例えば登場人物の人柄の問いに対して、「優しい」だけでは短いので、本文から理由を探して長く述べようとす。そこに子どもの思考過程が表れ、多様な意見が交流されることになる。

### 交流は三人ユニットを二、四組

交流する時は、第一発言者を教師が指名し、指名された子はノートを閉じて自分の意見を述べ、みんなはノートの自分の考えと比べながら聞く。次に「〇〇さん、私の意見を聞いてどうですか。」と第一発言者が指名し、その後「皆さん、私たちの意見を聞いてどうですか。」と全体に問う。このユニットを数回繰り返し、また自分の考えをノートに書いて交流する。夏休み明けの九月こそ、予習を始める良い機会だ。予習で子どもは賢くなり、教師は授業を劇的に変化させることができるのだ。

## 分野別講座「予習展開による国語科授業づくり」(高学年)

参加者 四十五名

まとめ 竹田 有希

### ○予習展開による国語科授業づく

り 高学年 久保 齋

高学年の子ども達の特徴は、発言の声が小さい、音読の声が小さい、答えが紋切型だということがあげられる。高学年の子どもたちは、できるだけ自分自身を周りにさらしたくないのだ。あつているところだけをいいたい。そして、意見を聞いている子たちは、わかっているところだけを聞いているから、意見を聞かないようになっていく。

### 思考過程を語る

子ども達を賢くするためには、発問に対して、主体的に考え、自分の考えを生産し文章化し、その生産物を交流し対話的に学ぶ。そして、友達の様々な意見を聞き、再び書く。さらに、それを再び交流する。賢くするためには、書く、交流が2クールは必要である。交流によって、脳を刺激し、より高いものを生産するためには、思考過程を語らせることが重要だ。例えば、『海の命』で、太一のことを同じ「たくましい」と感じた

しても、それぞれどこからそう感じたかはちがうかもしれない。なぜ、その結論にいたったのか思考過程を話すことが脳を刺激するので。思考過程を子どもに語らせるためには、教師が求めているものは正解ではなく、あなたの思考過程なのだと伝えなくてはならない。また、思考過程を子どもにださせるには、初めの書くときにたくさん書くことを要求する。一行だけでは、思考過程が出ない。

書いて交流し、再び書いて交流となると、四十五分の授業内で終えることは難しい。そこで、はじめの書く活動を予習で出しておく。予習のよいことは、どの子ども発問に対する準備ができるということ。教師も、どの程度書けているのかを見ることが出来る。

久保先生の提案は、すべてが、子ども達を賢くするために張り巡らされており、それでいてうまく一つにまとまっていくように感じました。「なぜ、その活動を行うのか？」という問いを、熟慮していかなくてはいいけないと痛感した。